

卷頭言

〈小特集 3〉 自己性と人格性

——ダン・ザハヴィ&ソフィー・ロイドルト講演会——

Special Issue 3 :

Selfhood and Personhood: The Lectures by Dan Zahavi and Sophie Loidolt

2023年5月2日、立命館大学間文化現象学研究センターと立命館大学人文科学研究所の共催により、国際的に著名な現象学研究者であるダン・ザハヴィ氏（コペンハーゲン大学）とソフィー・ロイドルト氏（ダルムシュタット工科大学）の講演会が衣笠キャンパスにて開催された。「主観」や「意識」をめぐる学際的な問題に現象学の立場からアプローチするザハヴィ氏と、「法・権利の現象学」や「現象学的倫理学」の分野での画期的な研究で知られるロイドルト氏を招いての本講演会は、現代の現象学の最新の動向を伝えるものになった。対面とライブ配信を併用した本講演会には、学内・学外から多くの参加者が集い、両氏の講演に関する活発な質疑応答がなされた。

当日のプログラムは下記のとおりである。

- 15:00-15:10 開会挨拶
- 15:10-16:25 ダン・ザハヴィ（コペンハーゲン大学）
「社会的に割り当てられた自己——人類学・文化心理学・哲学からの展望」
- 16:35-17:50 ソフィー・ロイドルト（ダルムシュタット工科大学）
「脆い企てとしての人格——人格であることの比類のなさ・自由・統一に関するフッサールの見解」
- 17:50-18:00 閉会挨拶

この特集は、ザハヴィ氏の講演のもとになった論文「個人性と共同体——社会構築主義の限界」、およびロイドルト氏の講演のもとになった論文「脆い企てとしての人格——フッサールにおける人格性と実践的行為能力」の翻訳を掲載し、講演会の記録とするものである。なお、各論文の詳しい書誌情報については、翻訳の末尾に付した「訳者後記」を参照されたい。

ザハヴィ氏の論文においては、人類学・文化心理学・認知心理学などの諸分野における、自己に関する社会構築主義（自己は社会的に構築され各人に割り当てられるという主張）が批判の対象になっている。「自己性(selfhood)」には、社会的に割り当てられるレベルと、一人称観点から経験されるレベルがある。共同体のなかで生きる自己を適切に論じるためには、後者のレベルを無視すべきではないのである。

ロイドルト氏の論文においては、「人格性(personhood)」が、実践的行為能力、すなわち実際に行為の主体として何かをなしうるという能力によって特徴づけられている。実践的行為能力は、私が人格であることを可能にする。しかし、そのような能力を発揮して生きていくなかで、人格は分裂や破壊の危機にさらされる。それゆえ統一的な人格であろうとすることは、危機と隣り合わせの「脆い企て」なのである。

ザハヴィ氏とロイドルト氏の論文のそれぞれの主題となっている「自己性」と「人格性」は、どちらも「私」を特徴づける性質であるという点で密接に関連している。「私」は、社会からの影響を受けつつも、あくまで「自己」自身であり、かつ社会のなかで統一的な「人格」として姿を現そうとする。両氏の論考は、こうした「私」の具体的な有様を描き出すための手がかりを与えてくれるだろう。

立命館大学文学部准教授

鈴木 崇志